新春雑感

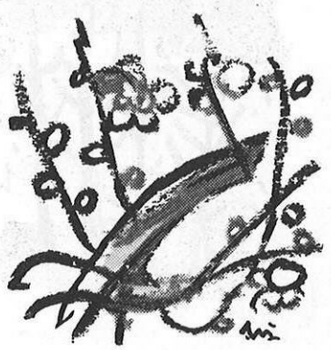
熊本でそうありたいもの

伊藤直臣

東京で長く暮していた者が熊本でそうありたいと思うものの数々……先つ食いものではモリソバがないこと。江戸ッ子はソバと言えばモリに限る。モリソバは冷えソバである。ただソバだけで何の附属物もない。それをダシのよく味の出てるのにソバを箸で挾んで長く垂れて、その先端を一寸ダシにつけてするするすると喉を通してのむようにして食べるのが通である。五月頃東京市内の街路樹が青葉を風になびかす季、一寸ソバ屋へ飛び込んでこの簡素で又値も一番廉いモリソバを食べる手軽さを思い出す。熊本にはこのモリソバが全然ない。冷しソバではザルソバだけだが焼ノリをかけてあって邪魔になる。ソバの味も半減し値も張ってるし、最も貧弱になっている。具ソバや具ソバの具を食べるのなどはソバ食いの素人である。

それからテンプラを食べたい。東京のエビのテンプラは手軽にどこででも食べられる。専門店でもデパートでも屋台でも、ピンと頭と尻のはね上ってリャンとしたやつを出してくれる。テンドンなどはどんぶりから頭と尾がはみ出してる位の棒のようなやつを持ってくる。テンプラをワリシタで食べる味、テンドンのどんぶりの中で蒸された何ともいえぬ味、テンプラ料理は東京に限る。関西へ来るとすべてがくづれる。然も東京では食べる本位の廉価な大衆向きである。然るに熊本などではテンプラ専門の料亭向きのところで、給仕女にチップの一つも出さねばならぬ位旦那さま向きに出来ていて、庶民的でないから我々貧乏人はなかなか寄りつけないのである。熊本のデパートのテンプラ、テンドンなどはエビでもイカでもあのピンと張りのあるあげ方は一つもない。皆グニャッとなって汁をすい過ぎてぶつぶつ切れて、テンドンならどんぶりの蓋の中に少さくちぢまってござる。中身のエビも少く味がなく汁の臭い位である。全くこの料理の技術がない。熊本はエビの産地であり、そのテンプラ材料のエビはどんどん東京へ送っている位であるのに、地元でそのテンプラ料理が栄えないのは何としたことだろう。デパートなどでも大衆向きにテンプラ料理のコーナーをつくって、そこのノレンをくぐったら板場の前に半円形の卓を囲んでお客が腰をおろして、食う一方の大衆テンプラの手軽なのをやってくれないものかしら。私は熊本へ帰ってこのソバとテンプラ店の栄えないのに、又料理のまづいのに寂しさを痛感する。

何事も文化文明で出来る時代、東京の流行も一ヶ月経てば地方へ伝播する時世、それなのにこのソバやテンプラの食の道は、三十年五十年前の昔も今も少しもかわらない。なんと伝播力の遅いとい



アジアの旅から

坂井隆治

うより皆無ともいうべき驚くにたえたることだろうか！。

それから熊本独特の料理として鯛料理をつくり出したい。九州の鯛と言って関東では極めて重宝がる。向うの鯛は黒鯛が関の山で、少しなま臭く味はとても落ちる。三角の真鯛などを食べた口には全く食べられないのだ。三角の鯛を持った熊本では鯛料理の名物をつくり出かしたらどうだろう。どういう鯛料理を出かすかは肥後人の舌と腕とのセンスに待つのみだ。田舎臭くては関東関西に名を轟かすには至らない。これも何年何十年経っても試みようとする者もない。状態はいかにも人後に墜ちることの多いこの国人の性格か！遺憾である。山陰の松江や米子などではあの湖の魚を利用して名物料理の名も天下に高い。

熊本にこうありたいものの数々はまだ沢山ある。食物にも土産品にも人間即ち県民性の中にも言いたいことは山々ある。時々言わしてもらえば又禿筆を以て些か述べてもみよう。（画家）

一昨年の九月十六日から十一月十七日まで約二ヶ月間、私は政府の青年海外派遣アジア中班団長として、セイロン、インド、ネパール、ビルマ、タイ、カンボジアの各国を訪問した。一行十二名でその中には、福岡、佐賀、長崎、鹿児島からの代表、それに細川家の次男近衛忠輝君も団員として同行したので、熊本県民である私を含め、半数が九州人ということになった。

さて、私達はインドを重点訪問国として二十五日の間、主要地を歴訪したが、国賓として過分の礼遇を受け、州政府からは儀典長がすべて案内してくれる。団長にはボディガードがつく。或はパトカーがついて、ノンストップで街路を走り民衆のかっさいを受けるなど、非常に歓迎された。一寸てれくさい思いがして恐縮したが、これも日本を背景にして、しかもその実力を高く評価されているからであろう。

十月二十七日は国立阿蘇青年の家に、天皇皇后両陛下を御迎えした感銘深い日であった。この日、この時刻に私達はインド首相インディラ・ガンジー女史と会談していた。場所は、ニューデリーの首相官邸である。温い握手を交し、彼女は事務机の周りに自由に座をとるようにすすめて、打ちとけた和やかな雰囲気をつくって頂いた。聰明にしてやさしい人物が、その言動の中からにじみ出ているのである。

前日までアラブのナセル、ユーゴーのチトー両大統領と会談された直後だけに一寸疲れ気味のようであったが、それでも約三〇分間インドの現状や自分の心境をフランクに話しをされた。いまインドは第三次経済五ヶ年計画の失敗、昨年から本年にかけて異常なカンバツによる食糧不足、そのための食糧暴動や学生運動、それにインフレの進行などインドを視察しても、その危機感が実感されたのである。この危局を背負うのは、いかに聰明でも女性の身として何だか痛々しい感じすら話の間にしてきた。それでもガンジー首相は、この難局を打開する非常な決意をのべられ、最後にマハトマ・ガンジー翁も父親ネール首相も、日本を尊敬し、そのよき理解者であった。自分も日本との親善関係を一層深めたいと結ばれた。私はインドとその国民のために一層の健在を祈る旨を話して、別れを告げたが、彫りの深い顔、聰明に輝く瞳は、今なお感銘深く残っている。

インドはその広さからも、人口の多いことからも、はるかに日本より大国である。しかしガンジー首相との対談の中からも分るように、いまインドは日本から学ぶべき多くのものがあることを自覚している。各州の主席大臣に会っても、よくこのことが話しに出てくる。これはインドだけのことではない。他の訪問国も程度の差こそあれ、先進国としての日本を高く評価して、日本に寄与する関心と期待が予想以上に大きいことを知った。そして日本からこれらの国に行って、現地で活動している人達が、よく現地人の尊敬と信頼をよち得ていることも何より心強いことであった。県出身の宮崎松記